

化礬土ノ反應アリ、炎色試験ニテ加里ノ存在スルヲ見ル、又吹管ノ反應ニ徴シ、「明礬」ナルベキヲ信ズ、該礦物ハ專ラ溫度低キ硫汽孔若シクハ噴汽孔ノ口邊ニ生成ス。

燒岳ノ硫汽孔ハ其數大ナルモノ十數箇アリ、小ナルモノ無數アリ、内唯一箇其東端ニアル者ノミ硫化水素ノ臭氣及反應アリテ硫黃ノ昇華ヲ其口邊ニ附着セシム、其溫度九十二度ニ達スト雖其他ノ者ニ至リテハ皆八十度前後ニアリテ主トシテ水蒸汽ヲ噴出スルノミ、鉛糖紙ヲ以テスルモ硫化水素ノ反應ナシ、硫黃岳北側ノ諸硫汽孔ニ於テ全ク其反應ナカリシ石灰水ハ此噴汽孔ノ瓦斯ニヨリテ容易ニ白濁ヲ生ズルガ故ニ燒岳ノ噴汽孔ニ限リ炭酸瓦斯ノ混入スルヲ知ル、又前記ノ白色礦物明礬ヲ成生スルモノニニアリ。之ヲ要スルニ、山頂ニ於ケルモノハ所謂酸性噴汽孔ニ屬シ硫化水素、亞硫酸瓦斯、鹽化水素(?)ヲ噴出シ、山側二千三百米ヨリ二千二百米ノ間ニ在ルモノハ所謂低溫度硫汽孔即チ溫度百度以下ニシテ水蒸汽、硫化水素、亞硫酸瓦斯ヲ噴出スルモノニ屬シ。二千米ノ山側ニ於テハ水蒸汽及炭酸瓦斯ヲ噴出スル謂所低溫度噴汽孔トナル、依テ山頂ヨリ山麓ニ漸次其活力ガ衰滅スル事ヲ證明スルコトヲ得ベシ、由是觀之、活動ノ主力ハ全ク頂上舊噴火口ニ集中セラレ中尾峠方面ニハ何等内部ノ擾亂ヲ來サザルヲ察知スルニ難

カラズ、而モ頂上ノ活動容易ニ靜マラントスルノ徵候ナキニ反シ燒岳及硫黃岳北側ノ噴汽ハ四十二年度ヨリ四十四年度ノ方其勢力ノ衰ヘタルヲ感ズルニ於テオヤ。

第四章 結 論

飛驒山脈上偉大ナル山塊ヲナセル御嶽、乘鞍ノ兩火山ハ既ニ其活動力ヲ其硫汽噴孔ニ止メテ辛ウジテ餘命ヲ繼グノ觀アリ、硫黃岳ト雖亦明治四十年ノ冬ニ至ルマデ同様ノ運命ヲ持シ來リシモノ遽ニ其活動力ヲ復活シ、近來活動旺盛トナレル淺間山ト相頡頏シテ信州東西ノ國境ニ噴煙絶ユルコトナシ、然リト雖今直チニ淺間、硫黃ノ兩火山ニ地下ノ或連絡アルヤ否ヤハ想像スルコト難シ、惟フニ活動ヲ誘致スベキ原因ハ共通ナルベシトスルモ活力ノ發動スル所ハ火山各個ノ山體ニアリト云フベシ。

輓近、本邦ニ於テ噴火爆裂ノ事稍多シ、樽前ノ「丸山」(Dome)湧出アリ、有珠^{ウヅ}ノ地體腫起アリ、又淺間噴火口底ニ於テモ時々腫隆陷凹ノ變化アリテ熔岩蠢動ノ狀ヲ察スルニ難カラズ。然

ルニ硫黄岳ニ於テハ年々爆破ニヨリ噴火口底ハ益々陷降シテ
現今ハ全ク之ヲ下瞰スル能ハザルニ至レリ、然而猶未ダ熔岩
塊ノ噴出セシモノヲ得ズト雖、四時火山灰ヲ噴出シ且時々多
量ノ噴煙ヲナシテ信州方面ヲ脅スヲ見ルモ熔岩溜ハ恐ラク火
口底ニ接近シ居ルコト恰モ現今淺間山ノ噴火口底ニ灼熱セル
熔岩ノ露出セルト大差無カラシ、而シテ其熔岩溜ニ於ケル熔
岩ノ性質ヲ、現今噴出スル火山灰火山砂ニヨリテ察スルニ、其
成生礦物ヨリスルモ亦其化學分析ノ結果ニ徴スルモ、已ニ舊
火口縁ヲ構成セル含雲紫蘇輝石角閃富士岩ト同種ニ屬スルモ
ノタルヤ明カナリ。已ニ舊火口縁ハ數次ノ爆裂作用及水蝕作
用ノ働キタル結果著シク當初ノ状態ト異レル地形ニ在リ、然
ルニ今又噴出スル所ノモノハ猶且古ノ熔岩ト其質ヲ同フスト
セバ、地下熔岩溜ハ新ニ現出シタルモノニハ非ズシテ、舊來ノ
熔岩ノ變態セルモノ、即或原因ニヨリテ舊來山下ニ固結シ居
タル熔岩溜ガ再ビ熔解シテ舊來溢出シタル如キ種類ノモノ
ヲ噴出スルニ至リタリト考フルヲ寧ロ妥當トスベシ、今若
シ新ニ舊キ火口道ニ沿ヒテ上昇シ來リシ新ナル熔岩漿アリト
セバ在來ノ熔岩ト融合シテ必ズヤ多少相違セル岩石ヲ作ルベ
キニアラズヤ、而シテ其岩石熔解ヲ生ゼシメシ原動力ハ明ナ
ラズト雖モ僅々四十五籽ニアル淺間火山ガ本火山ト軌ヲ一ニ

シ律ヲ合シテ各自其活動力ヲ復活シタリトセバ其原因タルヤ
或ハ共通ノモノナルヤモ知ルベカラズ、若シ然リトセバ淺間
山ノ活動ハ以テ硫黄岳活動ノ豫報トナスヲ得ベク、兩者運命
ヲ共ニスベキモノナリト云フヲ得ベシ。實ニ明治四十二年
ニ於テモ亦四十四年度ニ於テモ淺間ノ活動ト相前後シテ硫黄
岳活動ノ事アルハ恰モ前述ノ關係ヲ意味スルモノト思ハル。
硫黄岳其物ノ地質構造ハ極メテ簡單ナル成層火山ナルモ、其
基底ヲナセル地盤ハ其構造ニ於テ、從ツテ其地形ニ於テ頗ル
複雑ヲ極ム、然レドモ之ヲ一言ニシテ盡サンカ飛驒高臺ヲナ
セル古生層ニ角閃花崗岩岩漿ガ種々ナル状態ヲナシテ噴入
シ。水蝕作用ノ結果古生層ハ平均千九百米ノ準平面トナリ、火
成岩類ハ其上ニ露出シ、茲ニ多少凹凸ヲ生ジ殆ンド現今ノ排
水系ノ形成セラレタル頃、硫黄岳火山彙ハ其準平面上ニ湧起
シタルモノナリト云フヲ得ベク此點ニ於テモ御嶽、乘鞍兩火
山ト其成生順序時期ヲ同ウセル第二期以降ノ火山タルコトヲ
知ルベシ。又硫黄岳西方ニ露出セル斜長流紋岩ヲシテ第三期
ヲ代表スルモノトセバ是亦本火山ノ第三期以降ノモノナルコ
トヲ證スルニ足ルベシ。

硫黄岳火山彙ヲ構成スル岩石ハ皆輝石ヲ含ム角閃富士岩ニシ
テ其中ニ雲母ヲ含ム種類稍々異ルト雖其間ニ極メテ少量ニ雲

母ヲ舍ム中間物ヲモ噴出シアリテ全火山彙ガ一大岩漿溜ヨリ漸次分出シタルモノト云フヲ得ベシ。

抑モ雲母ハ酸性ノ富士岩ニ多シ、之ニ反シ輝石ヲ多量ニ有スルハ基性ナルコト常性ナリ、然ラバ本火山彙ニ於テハ基性富士岩ヲ先トシ漸次酸性ニ進ミタルヲ見ル。硫黃岳ノ地下ニ想像サレタル大岩漿溜ハ果シテ如何ナル性質ノ者ナリシヤ今之ヲ知ルヲ得ズト雖假リニ其中間ニ噴出シテ且最多量ニ溢流セル硫黃岳下部熔岩ヲ以テ該岩漿溜ノ性質ヲ代表スルトセバ、硫黃岳上部熔岩ヨリ稍々基性ナルベク、ヤガテ角閃花崗岩ニ類似セル化學性分ヲ有スルモノトナル可シ、然リトセバ硫黃岳ノ基盤ニ進入セル角閃花崗岩即チ霞澤岳ハ硫黃岳火山ノ祖先ニハアラザル無キカ。